文化服装学院　学校関係者評価委員会　報告書

文化服装学院　自己点検・評価委員会

平成 30 年 9 月 25 日

目　　次

1.　報告書骨子　2

2.　学校関係者評価委員　2

3.　学校関係者評価委員による文化服装学院自己点検・評価に対する総評　3

4.　学校関係者評価委員による文化服装学院自己点検・評価への提言　4

1)　教育理念　4
2)　学校運営　4
3)　教育環境　8
4)　学修支援　9
5)　教育活動　12

5.　学校関係者評価を受けて　20

6.　学校関係者評価委員会開催日程　21

1.　報告書骨子

学校関係者評価委員会（以下、当委員会）は、文化服装学院学校関係者評価委員会規程に基づき、平成 25 年 4 月 1 日に設置した。当委員会は文化服装学院（以下、本学院）の自己点検・評価の結果について客観性と透明性を高めるとともに、学外の関係者から専門的な助言を得るため、外部評価を実施する機関として組織した。

当委員会は、本学院の自己点検・評価を基に、自己点検・評価委員会の内部評価を参考に、関係教職員との具体的な意見交換を通して、本学院の学校運営・教育活動について検証・評価及び助言を行うことを目的として実施している。

当委員会委員は外部委員のみで構成され、本学院の教育理念を理解し、人材育成等に精通した学外の関係者の中から学院長が選考し、委嘱している。委嘱された委員は下記のとおりである。

平成 30 年度は、平成 29 年度の本学院の取組みに対し、当委員会としての評価・助言をいただいた。本報告書はその評価・助言をまとめ作成したものである。本報告書に記載した評価・助言は、具体的な事項であり、本学院の発展に資するという考え方に則り、過度に要約することなく記載している。

本報告書の作成にあたり、当委員会の委員の方々には、お忙しいところご尽力いただき、改めて深く感謝申し上げる。

2.　学校関係者評価委員

委員長　　徳岡敬也（株式会社トークス　代表取締役
　　文化ファッション大学院大学　専任教授）
副委員長　芦川照和（SUN デザイン研究所　プロデューサー　・　本学院卒業生）
委員　　山内　誠（一般財団法人日本ファッション協会 企画事業部　部長）
委員　　中村善春（株式会社繊研新聞社 業務局部長　展示会・人材教育担当
　　JFW-IFF　MAGIC JAPAN マネージャー/PLUG IN 事務局長）
委員　　磯貝章弘（株式会社東京ソワール　常勤監査役）
委員　　中本文太（株式会社 TSI ホールディングス　管理本部人事部長）
委員　　松本ルキ（株式会社オールファッションアート研究所　代表取締役・卒業生）

3.　学校関係者評価委員による文化服装学院　自己点検・評価に対する総評

本年度の自己点検・評価においても教育当事者が日々の教育を振り返って点検し、課題を見つけるという真摯な取組みを行っており、敬意を表する。

当委員会においては、学校の教育活動全般を大きな視点から見る必要がある。さまざまな観点に対して時代、業界、グローバル、エシカルなど文言では記さているが、大切なことは具体的でスピーディーな対応、先手を打つことである。自己点検・評価においては、具体的にどのようなアクションを取ったのかが記されなければならない。

教育理念は変わる必要はないという意見がある一方、時代に則し変わっていくべきだという意見もある。具体的なアクションをとる時、右か左かを判断する際に立ち返る場所、それが教育理念である。

ハラスメントの問題、法令遵守の意識は強くなっている。守るべき事を守るという意識を学生時代から認識させることが重要だ。

一旦問題が生じればブランドイメージは一瞬で崩壊する。その対策として専門チームを作る必要があるだろう。そこでは対外的な問題、学生からの相談、留学生が増えているなか文化の違いによる諸問題などに取り組むべきだ。

学生募集にとどまらない学校としての広報活動は重要であり、そのためにもネットワークの形成に努める必要がある。卒業生のネットワークを活用し、それを核にして業界とのネットワークを築いていかなければならない。

本学院には時代の変化を捉え、業界に教えられるビジョンを発信し、ファッションビジネスの拠点を目指してほしい。ファッションという感覚は全産業のコンセプトワークとして広い範囲で適用している。

ファッションは 10 年周期で変化する。業界の変化、消費者のメンタルの変化に対応するべく、教職員は学内にとどまらず常に情報交換をし、修得した情報を学生に伝えていくことが重要だ。

専門学校として学生に対し社会へ出ていく前の職業訓練は必要な教育であるが、専門知識が備わるベースとなる人間に対する、人間教育、教養、哲学が一層重要になるだろう。インフラ、デバイスが変化していっても、そのベースは常に重要な要素である。

企業の採用活動においても欲しい人材はそこが魅力的で、しっかりしている人材である。

AI の導入は更に進んでいく。科学、数学は AI が優る。AI にできないことはインテリジェンスだ。インテリジェンスの強化が今後の課題であり技術、直観力、哲学が大切になってくる。それは本学院のチャンスともいえる。

それを教育の中にとり入れていけるかが重要であり、本学院にはそれを作り上げていく資源、資産がある。そこに視点をあて見直していくことが重要だ。

今までの延長ではなく、もう一度違う視点を持つ必要があり、100 周年はその良いチャンスといえよう。

4.　学校関係者評価委員による文化服装学院　自己点検・評価への提言

平成 29 年度自己点検・評価において、本学院が設定している評価項目に対する委員からの提言は以下の通りである。

1)　教育理念

文化服装学院の教育理念、人材育成像

[本学院の現状]

服飾に関する専門知識・技術の教授を研究し、服飾教育界・産業界に貢献するとともに、高度な技術と教養を備えた創造性豊かな人材を育成することを教育の理念としている。

4 つの専門課程を設置し、それぞれ世界に通用するオリジナルのカリキュラムにより、国際舞台を視野に入れ個々の創造性や独創性を育み、時代をリードするクリエーターを育成している。

教育理念、人材育成像は普遍的な部分と業界の変容、グルーバル化などの外的要因を反映させながら、専門学校の本分を遂行するため適切に設置している。

[学校関係者評価委員からの提言]

(1)　ファッション教育機関として、世界水準を実現するにふさわしい教育理念が表されている。

(2)　教育、人材育成の理念としては、解りやすく纏められていて、共感が持てる。

(3)　教育理念は毎年変わるものではないと捉えている。

(4)　理念は不変でいいと感じるが、周辺環境の変化に対する情報収集と認識・理解の一致は定期的に図るべきだ。

(5)　教育理念は、従来推敲されてきたためか、概ね明快に記されていて、適切であると評価できる。

(6)　業界の変質、グローバル化などの外的要因に対応すべく、数年ごとの見直しは必要と考える。

(7)　グローバル化に関して、留学生の益々の増加を意識した文言が入っても良いと思う。

(8)　人間教育・コミュニケーション能力の醸成は学生を社会に送り出すうえで非常に重要と考える。

(9)　それぞれの項目が如何に具体的な方策として大項目２以降に落とし込め、実行できているかが重要だ。

2)　学校運営

①法人組織　②学校組織

[本学院の現状]

平成 26 年度から給与制度の変更(教員評価制度の構築含む)のため、給与制度検討委員会を設置し取組んでおり、平成 29 年度はメンバーを入れ替え、再スタートを切った。今後、国の補助金支給要件に「教員の評価制度」が盛り込まれることから、「教育の質の向上」を目標に制度の設計に取り組んでいく。

受動喫煙ゼロキャンパスを目指した取り組みにも着手している。

事務局内では各課・担当での業務の連携を図り遺漏が無いよう努めているものの、更なる連携が必要である。

教育職員、事務職員の資質向上・専門力強化のため各種研修会へ積極的に参加をしている。

教育課程、学生指導、学生管理、学校運営等の諸問題の検討・改善を図るため 6 つの委員会を設置し、概ね有効に機能している。

[学校関係者評価委員からの提言]

(1)　企業ではコーポレート・ガバナンスへの要請が強まっている中、学校関係やスポーツ界での組織(運営)のあり方が問題となっている。透明性や公正性の確保が課題であると思う。

(2)　時代にマッチした組織の改変を常に検討するべきだ。

(3)　100 周年に関して、在校生はもとより、卒業生、職員、理事に至るまで大きな節目となる。この後 100 年を迎えるために何をすべきか十分に検討頂きたい。

(4)　100 周年に向けた計画を練り上げていく過程で、ファッションとファッションビジネス、消費などの変化と、内部の現状分析を議論し、目指す方向、運営の改善点を全校的（すべての教員、本部組織関係者との議論が必要）にまとめていってほしい。中期的な見直し・改善の好機である。

(5)　組織運営において、構成メンバーの適切な評価・処遇は必要不可欠な要素だ。その領域において、計画に基づく具体的な進展がみられるのか否かが判断できない。

(6)　構成メンバーのキャリアモデル提示とそれに即した育成施策の実行が、中長期的に優秀な人財の獲得・維持につながると考える。

(7)　各組織・委員会ともに、はっきりした課題を持って対応しているように思うが、より良い結果を求められるケースがあるように見える。不断の取り組み努力を重ねてほしい。

(8)　各業務改善項目に対して、例外なく PDCA サイクルを継続することが重要と考える。

(9)　留学生支援についてはキャリアサポートも含め、今後より重要度が増していくものと考える。
(10) カリキュラムについては生命線ともいえるものと理解している。注力の度合いも高いと感じる。

③財務状況

[本学院の現状]

収支差額は、昨年度の△4,720 万円に対し、今年度は 370 万円のプラスと若干改善された。学納金収入の増加が収支の改善につながった。

今年度は人件費の削減は達成できたが、毎年取り組んでいる経費の削減は達成できなかった。

[学校関係者評価委員からの提言]

(1)　投資と削減の両立という困難な課題が存在している。
(2)　人件費の削減ありきでなく、学生数の増加等に注力することは道筋として正しいと思う。
(3)　人件費の適正化は、中長期的な要員計画およびそれに基づく人財確保・育成、適切な評価・処遇とセットで行われるべきものと考える。
(4)　支出増の原因究明と具体的な削減プランの有無が判断できない。
(5)　直近の収支に注視するだけでなく、学びの質を担保し、維持するために、確固としたカリキュラムに沿った計画的な教職員を確保する。
(6)　「ファッションに強く、IT に明るい人材（教員)」の確保は不可欠と考える。
(7)　各種事業など、増収策の知恵を出し合って実現して学生の負担を増やさない努力が必要だ。
(8)　夜間に加え、通信制の導入やシニアの学び直し等への取り組みは検討されているのだろうか。
(9)　他業界との競争において、ファッション業界の魅力(間口の広さやクリエイティブの喜び等々)を伝えてほしい。
(10) 結果、収支が改善していることは評価すべきポイントと考える。
(11) 収入の増加とコストの削減は永遠の課題だ。引き続いての経費削減が望まれる。

④法令等の遵守

[本学院の現状]

コンプライアンスの重要性について職員会議の場で注意喚起に努めた。

ハラスメントを未然に防ぐため、ハラスメントへの理解を深めるとともに、相談窓口の周知徹底に努めた。

外国人留学生の増加にともない、認識の違いからハラスメント、クレームとなることがあった。

[学校関係者評価委員からの提言]

(1) 法令等は概ね遵守されている。

(2) 様々な場面でコンプライアンスが大きく取り沙汰される中、教育現場に於いても大きな課題であると考える。某大学やアマスポーツ界での事例通り、学校のイメージによる就職活動の不利有利。進学先選定に於ける際の判断基準などにも関わる。

(3) 対策室・委員などを設置して具体的にどう対応するか、今そして今後どの様な事例が考えられるのか。法務・広報など幅広い議論が必要だ。

(4) ハラスメントはあるという前提で、情報の収集に工夫をするほうが良いと思う。

(5) ハラスメントについては、留学生の増加に伴う、相互理解に基づく未然防止策への注力が必要だ。

(6) ハラスメントについては学生（もちろん留学生も含め)、教職員の勉強会での徹底が必要だ。

(7) ハラスメントに対しては、多くの企業や組織の対策はまだまだ不完全である。知見や見識を生かせるようにするために、取り組みを進めていただきたい。

(8) ハラスメントに対する観念の変化を注視しながら、対応策を講じる必要がある。

(9) 個人情報の取り扱いについては非常に大きなリスクにつながるケースがままあるので、引き続き最大限の注意を払って取り組むべき項目と考える。

(10) 教材費の運用について、教職員の負担が大きい状態とはどのような状態なのか判断できない。

⑤社会貢献等の取組

[本学院の現状]

学友会活動の一環で、サスティナビリティ活動として残布の回収活動を本格的に開始した。赤い羽根共同募金、口と足で描く芸術家協会作品販売に協力した。

学びの場を広げるべく、オープンカレッジや通信教育の充実を図っている。

[学校関係者評価委員からの提言]

(1)　目標は高い方が良いと思うが、現在の取り組みも十分に高評価に値すると思う。

(2)　社会貢献にも様々な取り組みスタンスがあってよいと考える。様々なスタンスを学生に提示して、なぜ自身がこれをやるのか、自分自身で考え、実行する後押しをしてあげることが重要と感じた。

(3)　エシカルファッションの提案等、本学院の特徴を生かした社会貢献活動はイメージアップにもつながる。

(4)　SDGS など全世界的規模での取り組みの広がりに呼応して学生の意識徹底のみならず、全学的なベースと、位置づけを高めて向かうべき。また、公開講座の一層の拡充を望む。

(5)　社会貢献についてはそれなりの実績を残しているように感じられる。公開講座についても同様。ただ、”ものづくり”の視点だけでなく、”ファッション”の楽しみを広い世代に伝えていただきたい。

3)　教育環境

①　施設・設備

[本学院の現状]

古い校舎の取り壊しに伴い実習室、準備室が減少し、結果として学生の実習スペースが減少してしまった。

教室備品の不足や老朽化による買い替えは担当教員と相談のうえ、適切に整備している。新しく導入した備品についてはその使用方法の周知が不足していたため、改善を図っていく必要がある。

ファッションショーやイベントに使用する特殊機材については、学園施設部で管理してもらえるよう引き続き働きかけていく。

[学校関係者評価委員からの提言]

(1)　全学横断的調整を求める声が継続的にある。

(2)　講義室の清掃・原状復帰などは学生も主体的に関わるべきものだと認識している。しつけのレベルかもしれないが、そうした意識の醸成は社会人としても求められる重要な項目だと考える。

(3)　AV 機器、照明機材などの使用方法の徹底による寿命の延長もそうだが、使用可能なもの、古くとも良質なものを大切に使い続けるという指向は今後の世界、またファッションにも通じるものではないかと感じる。経費の削減といった現実的な課題解決にも寄与するのではないか。

(4)　課題と取り組みは、できる範囲で成果を出しているのではないか。とはいえ、環境の整備・改善努力は引き続いて求められる。

(5)　学園横断的な管理運営を進めてほしい。

② 付属機関・施設

[本学院の現状]

図書館、服飾博物館、ファッションリソースセンター、健康管理センター医務室、学生食堂など学生生活をバックアップする付属機関や施設を設置している。

また、学外活動の広がりを支援する付属機関も積極的な取り組みを行っている。一層の連携を図っていきたい。

[学校関係者評価委員からの提言]

(1)　全般にわたって、充実した状況が認められ、また更なる改善に向けての注力が感じられた。

(2)　充実した施設、実績の一層の活用を望む。外部との協業、発信強化を望む。

(3)　IT 化に係る部分においては、特に資料室系の電子データベース化の推進は、物理的なスペース削減もさることながら、将来的な学習環境の自由度向上に寄与するのではないかと期待する。

(4)　ファッションインキュベーションは形が変わっても継続すべき活動として検討を重ねてほしい。

(5)　各部署とも課題への取り組み及び改善が見られる。

4)　学修支援

① キャリア支援

[本学院の現状]

就職支援室では学生の就職活動を支援、促進するため学内での企業説明会や就活展示会を開催すると共に、個別相談、履歴書等の添削、面接指導を行っている。

学生の就職活動の実態を把握するため、「就職活動アンケート」を実施した。学生の要望、就職支援室の今後の活動方針の策定に大変有効であった。

求人情報はキャンパスプランというシステムを利用し、学生個人に直接メール配信を行っている。配信情報の活用率は予想を上回るものであったが、より活用率をあげる取り組みも必要だ。

就職決定率は 83.8%で、前年度決定率 81.4%より改善した。

教員と企業の交流を推進するため企業交流会を開催し、業界が求める人材に対し理解を深めることができた。

キャリア教育として、コミュニケーション力、マナー教育、ポートフォリオ制作指導、企業研修をキャリア教育担当の非常勤講師、クラス担任、就職支援室スタッフが連携し実施している。

[学校関係者評価委員からの提言]

(1)　就職支援に関しては非常に力を入れて取り組んでいることを実感している。

(2)　重要だが、就職及び学生のキャリア形成、人格形成に直結しているだけに、非常に難しい課題と思う。社会状況、業界状況、経済動向など多岐にわたる情報収集と分析が必要だ。

(3)　今の学生は、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力が不足しているように見受けられる、というコメントが 2017 年度の課題の中にある。その根幹には、相手や他者の背景・立場・状況・考えなどを想像し、理解しようと努める姿勢の重要性が認識されていないことがあると考える。コミュニケーションやプレゼンテーションにおけるテクニカルなスキルを伝えると同時に、自ら相手の状況を考えてみること、想像してみることの重要性を、より一層の重みをもって伝えてほしいと考える。

(4)　就職活動、企業開拓、企業情報の学生への浸透など、一定の成果を挙げているものの、より高い目標を掲げて活動しなければならないことも確かなことである。業界・企業とのより深いネットワークの構築も求められるのではないだろうか。

(5)　企業開拓及びコミュニケーション強化により、企業と学生との要望のミスマッチを減少させることが、早期退職等の対応につながる。

(6)　学校と企業間のつながりではなく、教職と企業のつながり、学生と企業のつながり等多角的なネットワーク形成が必要だ。

(7)　継続的な取り組みによって前進・改善が見られ、評価できる。

② 資格取得支援

[本学院の現状]

授業の一環としてカリキュラムに検定試験の受験を組み込んでいる学科もあるが、一方で自主的な受験でない事からモチベーションの低下、結果に結びつかないこともある。

検定試験の主催者側には、資格取得のメリットを引き続き業界へ働きかけてもらうよう依頼をしている。

[学校関係者評価委員からの提言]

(1)　モチベーションの向上に焦点をあてるという意見に賛同する。

(2)　資格取得のメリットを企業に対してより一層周知していくことは、大変重要な項目だと考える。

(3)　すでにファッション・アパレル企業においても、多様な職種・職能が求められており、様々なキャリアモデルが考えられる状況に鑑みて、対象資格の設定につい

ても随時検討することが同時に必要と考える。

(4) 無理に一括で受検させるよりは、主旨・必要性・メリットを十分に説くことに重点を置き、そのうえで、希望者にのみ受検させるべきと考える。

(5) 正直個々の職種に於いて、資格取得者がどの様に優遇されるのか、優位なのかが今ひとつ理解できない。

(6) 取得のメリットを深め、提示することが必要だ。そのために協会との議論を深めてほしい。

(7) 企業に対して資格取得を採用時の評価要素に加えてもらうように働き掛けることが重要と考える。

(8) 適切に運営されているように思えるが、実現すべき課題があるなら、取り組みを進めなければならないだろう。

③ 学生相談体制

[本学院の現状]

学生相談室の存在は新入生オリエンテーション、掲示物、カウンセラーによる講義等で学生に周知されつつある。

教職員との連絡・連携は状況により個別で対応している。

今後は自閉症スペクトラム障がいなど、何らかの障がいを持つ学生の対応なども取り組んでいく必要がある。

[学校関係者評価委員からの提言]

(1) 学生に対するきめ細かい対応がなされていると感じる。

(2) 留学生を含め、相談室への来談の壁を低くする工夫がポイントかと思う。

(3) ファッションに興味や関心を持つ若者が、たとえ障害を持っていてもその道を切り開くことができる、夢を実現できる場であることを目指し続けていただきたいと願う。

(4) 障がいを持つ学生はもちろん、様々な悩みを持ちやすい現代においては、”相談”は非常に重要な手段であるだろう。引き続いての支援の手を差し伸べてほしい。

④ 経済支援・健康管理

[本学院の現状]

貸与型の奨学金の返還が滞りなく進められるよう、細かく対応をしている。返還猶予制度の説明や、安易な奨学金額の増額を行わないための指導を行っている。

健康診断は滞りなく行われており、健康管理上の問題は発生していない。

[学校関係者評価委員からの提言]

(1)　奨学金の延滞率減少対策への注力が見られる。

(2)　奨学金制度の事前説明・フォローにより、延滞率の低下は評価できる。

(3)　独自の奨学金は返還延滞者が増加しているとのことだが、借入時のハードルの低さを担保しながらも、計画的な返済を実現させるための十分な指導が必要と感じた。

(4)　学生に知らしめる努力は続けてもらいたい。

⑤ 卒業生・社会人への支援

[本学院の現状]

すみれ会（卒業生の会）では web、Instagram、Facebook、Twitter と様々が媒体を利用し情報を発信するこで、期限切れとなった会員の再入会を促している。

在校生に対しては、奨学金を給付している。

卒業生の転職・再就職支援として人材エージェントと業務連携も徐々に認知されてきた。

卒業生の起業支援として、展示会、ファッションショーを開催した。

[学校関係者評価委員からの提言]

(1)　卒業生の組織化、再就職・起業支援などは学外の協力が必要なため難しいことも多い中、他校に比べ適切に実施されていると思う。

(2)　深く広いネットワークを十二分に活用していくことは、今後の学院および業界の発展に大きく寄与すると考える。

(3)　会の活性と合わせて寄付金の確保・学生を支援する制度の創設などにも取り組んでほしい。

(4)　引き続き卒業生支援の内容の充実を図っていただきたい。

(5)　すみれ会の重要性はますます増加すると思われる。

(6)　継続した取り組みが求められる。

(7)　起業支援は、教育カリキュラム内でも検討してはいかがだろうか。

5)　教育活動

① 学校のカリキュラム編成

[本学院の現状]

各科の人材育成目的に合わせて、基礎から実践力まで専門知識をしっかりと身に付けさせるために、随時カリキュラム編成の見直しを行っている。

各科のカリキュラムにアパレル業界に精通している非常勤講師の授業を取り入れ、より充実した内容となるよう取組んでいる。

特別講義を通じ業界の最新の状況を修得させている。教育課程編成委員会を通じ企業との連携を強化し、業界の現状に則したカリキュラムの構築に努めている。

常勤教員に対しては積極的な研修への参加を促し、実践的な教育とカリキュラムの構築に努めている。

[学校関係者評価委員からの提言]

(1) 時流に即すようカリキュラムを見直すという熱心な取り組みは評価に値する。
(2) 広さ･深さのある編成である。常に見直しに取り組む姿勢も高評価だ。
(3) カリキュラム編成が常にアップデートされるよう取り組まれている。
(4) 常に外部との連携を意識し、実業、グローバルといったキーワードへの対応を進めていることが理解できた。
(5) 今後より一層加速する領域と思われるので、継続的かつ実証的なアクションを引き続き期待したい。
(6) ファッションビジネスのパラダイム変化に対する基本姿勢を明確化する必要がある。
(7) カリキュラム編成委員会などは評価されるが、どこをいつまでに、どこまで見直すのかを明確にして一層の前進をしてほしい。

② 課程・教科のカリキュラム編成状況・授業研究

[本学院の現状]

それぞれの課程及び学科が教育理念、人材育成像の具現化に向け、特色を持ったカリキュラム編成を行っている。

実践的な教育を行うため、カリキュラムの見直しを行い、コンテスト活動やインターンシップ、企業とのコラボレーション活動など、学びの場が広がるよう授業研究を絶えず実施している。

[学校関係者評価委員からの提言]

1. 服飾専門課程

(1) 各科で実施しているカリキュラムに対して、点検・評価がなされている。
(2) 各課程･教科について各々適切な運営がなされており、評価も適切であると思う。
(3) 学生レベルの低下、留学生の日本語能力、完成度の個人差、学生のレベル差があるなどのコメントがあった。国際化を含めた学生数の維持とレベルの維持の両立は困難な命題かと思うが、今後のファッション･アパレル業界への人材供給（量･質）に係る重要な問題と考える。
(4) 外部の認識やニーズ等も踏まえ、本学院としての大方針が必要な項目と感じた。
(5) 多様な取り組み、対応がなされている。

2.　ファッション工科専門課程

(1)　各課程・教科について各々適切な運営がなされており、評価も適切であると思う。

(2)　各科における取組が明確に示されている。

(3)　ファッション・アパレル業界も日々大きく変化し続けているなかで、若い人材の自由な発想がより重要性を増している。

(4)　状況把握や情報収集、それに伴うアクションプランのアップデートは重要だが、業界の職種の多様化や IT の進化への対応は実務経験を積む中で自然になされていくと考える。

(5)　コミュニケーションや教養、また学習のルール、取り組みスタンスなど、よりベーシックな教育への取り組みを強化する必要があるのかもしれないと感じた。

3.　ファッション流通専門課程

(1)　各課程・教科について各々適切な運営がなされており、評価も適切であると思う。

(2)　各科におけるキメ細かい見直しが実施されている。

(3)　より直接的に消費者と接することになる領域において、企業との取組を多く進めていることは非常に重要かつ価値あることと考える。

(4)　特に流通においては常に最新の変化を注視する必要度が高い。

(5)　試行とはいえ、E コマースにも学生時から取り組むことは今後のマーケット対応に向けて大きな経験を得ることができたであろうと想像する。

(6)　ディレクターなど企業においてある程度の経験を要する専攻科については、より具体的な卒業後のキャリアモデルなどを示してあげる必要がある。

4.　ファッション工芸専門課程

(1)　各課程・教科について各々適切な運営がなされており、評価も適切であると思う。

(2)　より実践的なカリキュラムに改善するという姿勢が読み取れる。

(3)　カリキュラム改善に継続的に取り組みながら、一方でそのカリキュラムに学生を巻き込みきれない部分のもどかしさを感じた。

(4)　留学生も含め、受け入れる学生のモチベーション維持に対する施策の重要性を感じた。

(5)　改善が進んでいる。今後もスピードを上げて対応をしてほしい。

5.　Ⅱ部服装科・Ⅱ部ファッション流通科

(1)　各課程・教科について各々適切な運営がなされており、評価も適切であると思う。

(2)　現状を打破するべく様々な工夫や努力の跡が見られる。

(3)　「教育理念、人材育成」の文中からⅡ部についての記述が無くなったようだが、

本学の特色のひとつなので、今後も力を入れてほしい。

(4) Ⅱ部で学ぶ学生の意識は、より高いものがあるのではないかと想像する。

(5) 発表会への参加意識が高まったというコメントに、素晴らしい成果を感じた。

(6) 学生に対応する課題は多いと思われるが、継続的な改革を希望する。

6. 関連科目

(1) 各ファッションの世界をより深く知る為の科目が多く編成されていると感じた。

(2) 各教科において課題の抽出、それに対する改善への取り組みが実施されている。

(3) 関連科目およびそれを取り巻く教養の領域への興味・知的好奇心が後々の専門性の昇華レベルに差をもたらすのではないかと考える。

(4) 実物パターンの貸し出しやデザイン画の補習など、様々な工夫が成果につながることを示しており、評価すべきアクションと考える。

(5) ファッションの変容、市場・業界の変化など、以前と異なる動きが顕在化している今、常に服作りの関連領域に眼を配り、未来を先取りした教科の検討が必要と思われる。

③ 学外授業

[本学院の現状]

新たにインターンシップを受け入れてくれる企業が 24 社増加した。インターンシップに参加した学生の延べ人数は前年より若干減少したが、在籍学生数における参加者の割合は上昇している。

ヨーロッパ研修旅行は 2 年ぶりに実施し、90 名の希望学生が参加した。

企業主催の複数のアワード等で海外研修の機会を得ることもできた。

コラボレーション企画は企業、学生、教員共に有意義なものとなるよう、企画の選定、運営に努め、結果 45 件実施した。

[学校関係者評価委員からの提言]

(1) 前年は増加していたインターンシップの応募が減少したことは憂慮する。学科や専攻にこだわらず、企業活動の実態に触れるという目的で対象業種を広げても良いのではないかと思う。

(2) 外部との取組については、内容と期待する成果の認識を相手先と十二分にすり合わせておくことが必要だ。

(3) 受け入れ企業の開拓及びコミュニケーション強化により、基本体制の構築が肝心となる。

(4) 特にインターンシップについては、企業側に「採用につながる」「採用プロセスの一環」と考えるところと、「あくまで研修」「CSR」と考えるところ様々なの

で、学生本人への説明も含め、共通認識のもと実施することが重要と考える。

(5) 学生と企業と学校の意識、目的、実態など一般的にインターンシップをめぐるズレが顕在化している。議論して再定義が必要だ。

(6) インターンシップ受け入れ企業の獲得、ヨーロッパ対象の海外研修の是非、コラボレーション内容など、将来を先取りして手を打つ姿勢が求められるように思う。将来を眺める視線を大切にしたい。

④ 学校行事

[本学院の現状]

文化祭、入学式、卒業式、ドレスコードデーなどの各行事は概ね滞りなく実施することができた。学内コンテストについては、改善がなされている点はあるものの、更なる改善の余地を残す。

[学校関係者評価委員からの提言]

(1) 学生の気質や興味の変化も注視する必要がある。

(2) 学校行事は学生の自主性や実務能力を高める良い機会だと思う。

(3) 学内コンテストは、対外的な PR も含めより重要なイベントとして注力してはどうかと感じた。

(4) 目的に立ち返って常に改良、見直しが必要だ。形式に陥るのが最悪だ。

(5) 常に新しい工夫をしてほしい。

⑤ 課外活動

[本学院の現状]

学友会委員は各クラスの代表学生である事からリーダーシップの育成を図るため研修を実施した。研修は一定の評価があったものの、内容、費用で課題も残った。

サスティナビリティ活動の一環としてヘネス・アンド・マウリッツ・ジャパン社と共同で残布の回収を始めた。

学友会主催の行事においては準備段階で担当学生の欠席が目立ったが、常任委員を中心に運営することができた。

委員研修会はⅠ部・Ⅱ部合同で学内において研修を実施した。Ⅰ部学生とⅡ部学生の交流ができ有効であったが、研修内容の充実を図るため次年度は北竜館で実施する予定だ。

[学校関係者評価委員からの提言]

(1) イベント関連では、リスクヘッジしながらも学生の主体性を重視することが参画意識向上につながると考える。

(2)　特に課題を感じる部分はないが、学生全体における認知度は十分なものなのか、という率直な疑問が浮かぶ。

(3)　リーダーシップに代表されると思われる、学生の勉学姿勢やメンタル面など、時代的、社会的問題とも重なっている。文化服装学院だけでない解決法を探してみるのもよいのではないか。

⑥ 教育・成績評価

[本学院の現状]

評価基準として「評価内容基準」を定めた。学業評価、授業姿勢などの評価の比率は各科、各科目で検討し次年度設定する。

学年末から Web 成績登録を開始した。トラブル、混乱もなく順調に進めることができた。しかしまだ学生や保護者が Web で成績を確認することができず、調整を進めている。

[学校関係者評価委員からの提言]

(1)　透明性、納得性など一朝一夕には確立できない問題であり、改善途上という自己評価のとおりだと思う。

(2)　IT の活用による利便性の向上は、継続的に取り組むべき項目と感じる。

(3)　差別化ではなく、これからの前提となる分野と思われる。

(4)　運用の中で改善を望む。

(5)　引き続きスピードアップを図りながら調整を進めて欲しい。

(6)　改善傾向が見られることから、概ね適切に運用されているのではないか。

⑦ 退学者への対策

[本学院の現状]

今年度の退学率は昨年比▲0.03 でほぼ横ばいであった。退学理由では、進路変更が最も多く、学業不振、家庭の事情、健康上の問題、経済的理由と続いている。家庭の事情、健康上の問題が増加している。

学内再入学制度を利用した学生も一定数おり、進路変更をした上で、本学院内で修学を続けている。

[学校関係者評価委員からの提言]

(1)　変化も大きく課題の多い項目だが、ここまで対応できることが本学院には求められていると思う。

(2)　学業不振による退学者が減少していることは、カリキュラムを含めた諸々の施策が身を結んだ一つの成果と感じる。

(3)　学業不振を理由とする退学者が減少した点は、成果として評価できる。
(4)　実際に退学者が減っているのは評価できる。
(5)　留学生対策の構築は急務である。
(6)　所轄官庁からの指摘は、早急に改善を求められる。
(7)　一定の効果が認められる。

⑧ 学生募集

[本学院の現状]

派手な広告宣伝は教育機関という特性上似つかわしくないが、24 時間テレビなど複数のテレビ番組から取材の依頼があり、その対応、放映により認知度の向上につながった。今後も積極的に取材対応をしていきたい。

近年衣装制作を希望する志願者が増えている中、コラボレーションでアイドルグループの衣装制作を実施し、多数雑誌に取り上げられたことは効果的であった。

SNS の活用を促進している。これまでの Twitter と Facebook に加え Instagram の配信を開始した。本学院の強みであるビジュアルを生かした訴求が可能となった。

[学校関係者評価委員からの提言]

(1)　18 歳絶対数の減少という状況下で、重点課題としての取り組みは適切である。
(2)　ホームページや SNS での情報発信は、発信者の感性により大きくその結果が左右されると思う。クリエーターを育てる学校の HP がダサかったり、見にくかったり、意味不明ではかえって逆効果だ。誰でもメディア発信者になれる現在、その質と内容が問題と思う。
(3)　現代の若者に極めて訴求力の高いイベント及び SNS の活用を研究・分析する必要がある。
(4)　服装造形分野の入学者が増加したことは一つの成果と考える。
(5)　本学院のブランド力は非常に高いものがあるので、より広く本学院の魅力を PR し、積極的に学生獲得にアクションしていくことが必要だ。
(6)　バイヤー、MD、VMD、PR などの人気が高まっている職種をクローズアップすることも有効と考える。
(7)　差別化へ方向性を明確にして発信を強化する。この流れを継続してほしい。
(8)　様々な取り組みの成果が見られる。
(9)　「ファッション甲子園」のように、高校生や中学生を対象とした、応募方のコンテストの仕掛けなど、対外的に実施できる催しは、工夫できるのではないか。集客に向けた更なる工夫が求められるのだろう。

⑨ 国際交流学生募集

[本学院の現状]

23 カ国から約 750 名の留学生を受け入れている。中でも中国からの留学生は約 500 名と多い。語学力不足の学生もいるが、できるだけ日本語で対応するようにし、学生自ら日本語の必要性を痛感するよう働きかけている。

学園全体では 13 か国 36 校の学校と提携をしている。米国ニューヨーク州ファッション工科大学への短期研修を企画したところ大変関心が高かった。今後は他校の研修も検討していく。

本学院は中国上海と大連に提携校がある。上海との提携校は概ね順調に運営されている。大連の提携校の運営についてはまだまだ改善と相互理解が必要な状況である。

[学校関係者評価委員からの提言]

(1) 留留学生の受け入れはさらに積極的に増やすべきと思う。

(2) 留学生の日本語力強化に成果がみられるが、より一層の工夫をしていく必要があると思う。

(3) グローバルな評価も高いので、留学生の増加を背景に一層、世界を視野に入れて存在を高めていくことを望む。

(4) 留学生の増加は、メリットが多い反面、デメリットも存在する。今後も継続して取り組むことが求められる。

(5) 留学生が多く、悩みも大きいことは、グローバル化のための乗り越えるべき課題でもある。一つ一つの課題を乗り越えるたびに、他校に先んじる一歩になるはずだ。日本に類のないインターナショナルなファッションスクールを構築するチャンスと捕らえたい。

(6) 日本国内での留学生の就職。法的根拠も含め、その道が整備されれば大きな利点になると思う。日本社会全体の問題でもある。

(7) 業界全体として海外との関わりは高まりこそすれ減少することはあり得ない状況だ。学生の受け入れもさることながら、本学院としての海外との関わりをより広く、深いものにする方向で、中長期的に様々な施策を検討されてはどうか。

(8) 中国を中心とした留学生の気質やファッションセンスには急速な変化が認められる。一方、当然のように日本人と国民性が異なるため、そうした点を踏まえて、先進的な留学生対応を確立する必要がある。

5.　学校関係者評価を受けて

学校関係者評価委員会の委員各位には、ご多忙の中委員をお引き受けくださり心より感謝申し上げます。外部の方々から学校運営ならびに教育活動に関し具体的な評価を頂戴することは今回で6度目となります。

今回もファッション業界における製造部門、人事部門、メディア部門、プロデュース部門等の皆様から多岐にわたり、幅広い視野での提言を頂戴することができ、改めて外部評価の重要性を痛感しております。また、日ごろの文化服装学院の教育活動に対し、賛同と高い評価をいただき大変ありがたく存じます。

平成29年度文化服装学院自己点検・評価に対する学校関係者委員から頂戴した提言を今後具体的に活用するため、内部評価委員を中心に検討会を開催していきます。

検討会では学校関係者委員からの多数の提言のうち、横断的かつ早急に取組む課題の共有を行い、次年度の目標とさせていただきます。検討会の結果は職員会議や文書で周知に努め、改善に取組んでまいります。

また文化服装学院では創立100周年を見据え、永続的に教育活動を行っていくための様々な分野における再構築を進めております。今回頂戴したご意見はそちらにも生かす所存です。

今後とも自己点検・評価ならびに学校関係者評価を継続し取組んでまいりますので、皆様方のご協力を賜りたくお願い申し上げます。

ご尽力いただきました委員各位には改めて深く感謝申し上げます。

6.　学校関係者評価委員会開催日程

第一回

平成 30 年 7 月 19 日（木）17：00～18：00

文化服装学院 B 館 4 階 B044 会議室

出席者（敬称略・順不同）

委員：徳岡敬也、芦川照和、山内誠、磯貝章弘、中本文太、松本ルキ、中村善春（欠席）

オブザーバー：相原幸子、野中慶子、門井緑、西平孝子、増田大助、宮原勝一、
山田とし子、野沢彰、此村公子、山口容子、福田文子、
宇都宮愛、須藤久栄、渡井邦重、浜田法子、古澤直子

配布資料：平成 29 年度文化服装学院自己点検・評価
文化服装学院　自己点検・評価
内部評価委員による評価表及び学校関係者評価委員による評価表
文化服装学院　自己点検・評価　内部評価点数表
学校関係者評価委員名簿
平成 29 年度学校案内書／学科一覧

第二回

平成 30 年 9 月 19 日（水）15：30～17：00

文化服装学院 B 館 4 階 B044 会議室

出席者（敬称略・順不同）

委員：徳岡敬也、芦川照和、山内誠、中村善春、磯貝章弘、中本文太、松本ルキ

オブザーバー：相原幸子、野中慶子、門井緑、西平孝子、増田大助、宮原勝一、
山田とし子、野沢彰、此村公子、山口容子、福田文子、
宇都宮愛、須藤久栄、渡井邦重、浜田法子、古澤直子

配布資料：文化服装学院　自己点検・評価
内部評価委員による評価表及び学校関係者評価委員による評価表

以上